



名大祭

—五〇年のあゆみ—

山口拓史
堀田慎一郎

名大祭 — 五〇年のあゆみ —

山口 拓史

堀田慎一郎

目 次

はじめに…………… 2

一 愉快な名大祭…………… 3

二 名大祭の誕生…………… 12

三 時代を映す名大祭① — 一九六〇年代…………… 20

四 時代を映す名大祭② — 一九七〇年代…………… 29

五 時代を映す名大祭③ — 一九八〇年代…………… 34

六 時代を映す名大祭④ — 一九九〇年代…………… 40

七 時代を映す名大祭⑤ — 二〇〇〇年代…………… 45

おわりに — 名大祭の未来 —…………… 54

はじめに

現在、名古屋大学では、六月初旬の木曜日から日曜日にかけて名大祭が開催されます。名大祭は、一九六〇（昭和三五）年から一度も中断されることなく毎年行なわれ、二〇一〇（平成二二）年で五一回を数えました。

名大祭の特徴の一つは、日本の大学祭としては珍しく、初夏に開催されることです。大学祭は秋が普通であり、少なくとも名古屋市において初夏に本格的な大学祭をおこなっているのは、おそらく名古屋大学だけだと思います。そのこともあって、名大祭には毎年五万人もの人々が足を運びます。名大祭は、名古屋大学の最も重要な行事の一つであるとともに、名古屋における初夏の大イベントとして地域に定着しているのです。

本書は、この名大祭の半世紀を超える歴史を紹介するものです。また、名大祭の現在と過去の比較を通じて、今日における名大祭、ひいては大学祭の意味を歴史的に考察する手がかりを示すことができればと思います。

一、愉快な名大祭

◆第五一回名大祭 ― 「だって、笑顔でいたいじゃない」

二〇一〇（平成二二）年六月三日（木）から六日（日）にかけての四日間、名古屋大学東山キャンパスにおいて、第五一回名大祭が開催されました。名大祭本部実行委員会の集計によると、期間中の来場者は約五万人に達しました。

第五一回名大祭のテーマは「だって、笑顔でいたいじゃない」でした。これは、環境学研究科大学院生の原案によるものです。学生からの応募を中心とする四二案から、学生団体からなるテーマ選考会議が三案を選び、これらによって全学生および職員による投票をおこない、選ばれた原案を実行委員会が修正のうえ決定しました。このテーマについて、名大祭本部実行委員会委員長は次のようにコメントしています。

名大祭は前回で半世紀を迎え、今回の名大祭はそこからの新たな一歩と言えます。過去五〇年の歴史を振り返ると、決してその道のりは平坦ではありませんでした。



第51回名大祭の豊田講堂前特設ステージ（名古屋大学広報室提供）

それでも今年、名大祭は次の半世紀に向けて歴史を刻みます。

“だって、笑顔でいたいじゃない”。

エネルギーと笑顔の溢れる名大祭は、今年も歩み続けます。

平坦ではなかったとしながらも、名大祭の五〇年の歴史をエネルギーと笑顔があふれるものであったと総括し、この伝統を次の五〇年にも伝えていこうという意図が読み取れます。テーマキャラクターも、『不思議の国のアリス』に登場する、いつも笑顔のチェシャ猫をモチーフにした「にゃんたる」が選ばれました（表紙の写真を参照）。

◆模擬店・フリマ・ステージ

四日間の会期でとりわけ多くの参加者がある土曜日と日曜日、地下鉄名古屋大学駅から地上へ出ると、まず目に入るのは、とくに人が多く集まっている模擬店（飲食店）、フリーマーケット、豊田講堂前特設ステージ、第二グリーンベルトステージです。

模擬店は、名大祭初期は必ずしも主要な催しではありませんでしたが、その是非はさておき、今やこれを抜きにして名大祭を語ることはできません。第四九回までは、第二グリーンベルト側のメインストリートおよび豊田講堂テラス前が模擬店エリアとされ、店の数は約二〇〇を数えました。ただ第五一回では、模擬店エリアは北側メインストリートのみとされ、店数も四六と激減しました。その理由は、第七章でふれたいと思います。

フリーマーケットは、第二グリーンベルトからメインストリートにかけて、多くの店が並んでいます。本部実行委員会企画として本格的にパンフレットに載るようになったのは一九九二（平成四）年からです。すっかり名大祭の風景として定着しました。

屋外ステージには、豊田講堂前の特設ステージと第二グリーンベルトの常設ステージがあり、音楽やダンスのライブやイベントが頻繁に行なわれて、名大祭の花形ともいえる空間になります。ステージから音楽などが聞こえてくると、名大祭がはじまったことが実感されます。

第51回名大祭学術企画一覧（五十音順）

赤崎特別教授の青色LED研究／明日の自分に～名古屋大学卒業生による講演会～／イスラム文化／イネとメダカで展開する生命科学研究の現場～イネの不思議な遺伝子とメダカ変異体コレクション～／色のある分子～ものづくり最前線／宇宙からやってくる謎の粒子、宇宙線／エネルギー変換化学への招待／カーボンナノチューブが拓く低環境負荷エレクトロニクス／変わった動物と染色体をみる／環境医学研究所公開／環境調和型エネルギー変換技術の研究／キガコワレットキ／ケミストリーギャラリー一般公開／講演会 なぜ「生物多様性」は破壊されるのか～COP10を前に考える～／講演と討論の広場／酵素のかたちと働きをしらべる／サイエンスカフェ森林気象水文／サイエンスワールド／地震と火山を作ろう！／自然界での物質循環／自然言語処理ってなんだろう？／自然には理由がある！？／シミュレーションがひらく豊かな世界／植物研究が立ち向かう世界の食糧危機／生物相関機構と資源昆虫のオープンラボ／世界の子どもに愛の手を／セクシャルマイノリティ講演会／素粒子研究の最前線へ／第13回名古屋大学博物館特別展／対話と思いやりの社会へー情報技術のいまとこれから／地球大気と宇宙空間のはざままでーオーロラを通した超高層大気の研究／地球水循環センター研究紹介／展示会～沖縄基地問題と安保50年／電子顕微鏡で見るミクロの世界／途上国開発の研究事例／土木展／囚われのオルガネラと被子植物の起源／名古屋大学附属図書館2010年春季特別展／半導体、塩、チョコレートー身の周りの「いろいろな結晶」ー／触れて感じるロボット技術／ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー公開ツアー／法律相談／ポスターストリート／ミニ平和資料館／身の回りの放射線・放射能～自然放射線を見よう～／名大生によるシンポジウム～名大生、こんなこと考えてますっ！～／名大発！日本の未来を考えるディスカッション／名大寄席／ものの年代はどうやってはかるの？／横井・安田研究室研究公開／流体力学の世界にふれてみよう！／量子エネルギー工学展／レーザー光で同位体を測る／ロビーといっしょ

（第51回名大祭パンフレットより作成）

◆さまざまな企画

第五一回の名大祭パンフレットの目次をみると、さまざまな企画が六つに分類されています。「音楽」（一九企画）、「エンターテイメント」（二〇企画）、「参加・体験」（二七企画）、「展示発表」（一六企画）、「学術」（五四企画）、「その他」（一〇企画）というカテゴリーです。

ほとんどは名大祭本祭期間中（六月三日～六日）に開催されたものですが、これに先立って行なわれるプレ企画にも、仮装行列やスケートなどの有名企画があります。仮装行列は第一回名大祭誕生以前からの長い歴史を持ち、スケートも第一三回以来の企画です。

企画の内訳を見ると、よく指摘される名大祭の娯楽化・イベント化は否定できません。ただ、屋内で行なわれることがほとんどなので外からはあまり目立ちませんが、学術企画も全体の三分の一以上を占めています。学術企画のほとんどは、名古屋大学の研究機関や研究室などによるものです。名大祭会場では、全体のパンフレットのほかに、学術企画だけを集めた『学術系パンフレット』も配布されています。

娯楽と学術が共存する大学祭。それが現在の名大祭であるとも言えそうです。

◆名大祭本部実行委員会企画

第五一回名大祭では、本部実行委員会が行なった企画（本部企画）が一四ありました。これらは、多くの名大生が参加する名大祭、参加者に親切な名大祭をめざした企画です。

たとえば、先ほども少しふれたプレ企画としてのスケート（「恋してスケート〜今年もやってきた!! 名大祭直前企画〜」、初日のオープニング企画（「51st名大祭オープニング企画〜STAR☆TRAIN〜」）、最終日の「後夜祭〜the dreamy carnival〜」、フリーマーケット）、「サイエンスワールド」、「第5回盆踊り〜おもしろいきりBON!〜」、「名大生によるシンポジウム〜名大生、こんなことを考えていますっ!〜」などです。

とくにこの年は、目玉企画の一つとして、二〇〇八（平成二〇）年にノーベル物理学賞を受

賞した、名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長の益川敏英博士などを講師とする「明日の自分」名古屋大学卒業生による講演会」が開催され、大盛況を博しました。

ジャンルはさまざまですが、名大祭の節目となる企画、伝統ある企画、名物となっている企画が目につきます。また、模擬店を統括するのも本部実行委員会です。名実ともに、本部実行委員会が名大祭のかなめであることが分かります。

◆名大祭一・二年生実行委員会企画

名大祭には、本部実行委員会のほか、一・二年生実行委員会が組織されています。以前は教養部実行委員会でしたが、一九九三（平成五）年一〇月に教養部が廃止されたことにもなつて改称されました。

この一・二年生実行委員会も、八つの企画を開催しました。特設ステージのライブ企画である「Vital Beats」、第二グリーンベルトステージで「ミス名大祭」などのイベントを行なう「Crystal Union」、お化け屋敷「Shout And Sense」、いろいろなスポーツ大会からなる「Mr. Launcher」など、楽しいイベントばかりです。

その中には仮装行列も含まれています。この年の「仮装行列2010 Fancy Stars Marching」みんなで紡ぐ夢物語」は、五月一六日、名古屋随一の繁華街である栄の久屋広場をメイン会

場に、名古屋女子大学中学校・高等学校吹奏楽マーチングバンド部や、交通誘導を担当した中警察署など、多くの方々の協力を得て行なわれました。

当日は、名古屋大学の新生が、クラスごとに仮装をして栄の街を行進しました。その仮装ぶりは、名大生の意識や関心を映す鏡ともいえ、五〇年前の第一回に比べるとずいぶん様が変わりしていますが、今や名大祭の枠を超え、名古屋の風物詩になっているといっても過言ではないでしょう。

◆有志企画

本部実行委員会企画および一・二年生実行委員会企画のほかは、実行委員会以外の学内・学外の団体や機関が、一定の手続きを経たのちに参加するものです。原則として、責任者は名古屋大学の在学生または職員であることが求められますが、学内団体の企画に支障をきたさない範囲で、学外団体が名大祭に参加することも認められています。

これら有志企画の具体的な内容については、次ページの一覧をご覧ください。

第51回名大祭有志企画一覧（カテゴリー内五十音順、学術企画を除く）

[音楽] アカペラライブ〜Step〜（名古屋アカペラサークルJP-act）/ Electone Festival '10 (WHITE COLOR) / 軽音ライブ（名古屋大学軽音楽部フュージョンセッション）/ 芸音楽部ライブ2010（芸音楽部）/ C. Bライブ（C. B）/ ジャズコンボ、ピックバンドライブin名大祭（軽音楽部ジャズセッションエーデルレーテジャズオーケストラ）/ Shana LIVE2010（Shana Club）/ 豊田講堂コンサート（名古屋大学ピアノ同好会）/ 中庭ライブゆずまつり（ゆずず）/ なごすい水無月の宴（名古屋大学吹奏楽団）/ NAGOYA ROCK FES' 10（R246）/ フュージョンセッションLIVE @特ステ（名古屋大学軽音楽部フュージョンセッション）/ ブルーグラスカフェ（名古屋大学ブルーグラスサークル）/ 名大祭演奏会（名古屋大学古楽研究会）/ 名大祭ライブ（名古屋大学医学部軽音楽部）/ ライブ（仮（u. n. i. band）/ ライブ喫茶 PUTIÑA（名古屋大学フォルクローレ同好会）/ ライブハウス（名古屋大学ソング同好会）[エンターテイメント] 居合道演武会〜直心〜（名古屋大学居合道部）/ お客様と、共にビートルズ・マジックライブ（録君 & マジジョンナ）/ Campus Communication Square' 10（名古屋大学放送文化研究会）/ 劇団バックスの水族館第62回公演（劇団バックスの水族館）/ 大道芸人大集合（大道芸人大集合）/ Doppin Festival（Doppin Medits）/ 名古屋大学奇術研究会 クロスアップマジックショー（名古屋大学奇術研究会）/ 名古屋大学劇団新生 名大祭公演（名古屋大学劇団新生）/ N. U. STYLE（N. U. STYLE）/ ポエラニオリタヒチ タヒチアングダンスショー（タヒチアングダンススタジオ ポエラニオリタヒチ）/ 名大祭映画上映会（名古屋大学映画研究会）/ 名大祭公演『君に、伝えたい』（民族舞踊同音舞）/ 名大祭で踊ってみた（名大ダンスーズ（笑））/ 名大祭マジックショー（名古屋大学奇術研究会）/ ライブペイント（イワシヤンテッヒュ）/ らんまつり（名古屋大学“快踊乱舞”）/ らんまつり 第2部（名古屋大学“快踊乱舞”）[参加・体験] ☆気軽にカラーセラピー☆（Sun flower）/ 来て見て知って☆グローバルライブ（異文化交流サークルACE）/ 巨大すごろく of 防災（震災ガーディアンズ・防災班）/ クイズ体験イベント（名古屋大学クイズ研究会）/ クイズ名大カップ（名古屋大学クイズ研究会）/ ゲーム体験会（シミュレーションゲーム研究室）/ 工作でエコ〜よJ（名古屋大学環境サークルSong Of Earth）/ 国際的な頭脳スポーツを体験しよう！（名古屋大学コントラクト・ブリッジ・サークル）/ 心のエステ（サークル・リパティ）/ 自転車でGO！（アマチュア無線研究会）/ 心理展（文学部 心理学研究室）/ ズバリ言うわよ2010（椋山女学園大学易学研究会）/ 峠の工房（名古屋山歩きサークル「さんぽ」）/ 繁盛行路（ラガドーンタバーン）/ Paper Craft（名古屋大学人力飛行機制作サークルAir Craft）/ 名大オープン（名古屋大学庭球同交会連盟）/ 模擬病院（鶴舞祭実行委員会）/ WakuWakuアメフト〜大人から子供まで楽しめる〜（名古屋大学アメリカンフットボール部）[展示発表] 化工展（分子化学工学教室）/ 貨物特集（名古屋大学鉄道研究会）/ 水彩展（名古屋大学水彩部）/ 生物祭2010〜生き物を探して〜（名古屋大学生物研究会）/ ゼロ年代SFベスト特集（名古屋大学SF研究会）/ タテ看（名古屋大学水彩部）/ 「小さな」人工世界が創る「大きな」びっくり11（情報科学研究科 複雑系科学専攻 創発システム論講座 有田・鈴木研究室）/ 道具の会の紹介と協力要請（自立のための道具の会）/ 美術部 部展（名古屋大学美術部）/ P. step（桜梅桃季）/ フォーミュラカーがやってくる！！（名古屋大学フォーミュラチームFEM）/ 星空プラネット（名古屋大学天体研究会）/ ホロコースト〜何が起こったのか！？（スタンドファーム）/ 漫画展示会（名古屋大学漫画研究会）/ みんなの文化（第三文明研究会）/ 名大祭写真展（名古屋大学写真部）[その他] セル画 展示会・体験会（A. M. I）/ 第四十七回名大祭茶会（名古屋大学茶道部（松尾流））/ 名古屋大学文芸サークル・サークル誌販売会（名古屋大学文芸サークル）/ フェアトレード販売（名古屋大学生協ユニセフ班）/ 名大祭演武会（名古屋大学合気道部）/ 名大祭茶会（名古屋大学裏千家茶道部）

（『第51回名大祭パンフレット』より作成）

◆名大祭の理念

名大祭は、本部実行委員会や一・二年生実行委員会が中心となって企画立案・実施される点で、学生の学生による学生のための名大祭、といえるでしょう。また同時に、名大祭に足を運ぶ人々の多くは、名古屋大学の構成員ではない市民であり、名大祭は市民のものであるともいえます。

しかし、具体的な内容を見れば、五〇年の間に名大祭が大きく変容したことは明らかです。二〇〇二年に開催された第四三回名大祭のパンフレットで、本部実行委員会委員長は次のように述べています。

過去四二回の歴史の中で名大祭は様々な変遷を辿りました。当初は、名大祭における活動が名古屋大学における学術活動の発展や社会の発展に寄与するものとされてきましたが、現在はそのような理念が消失し多少なりともイベント化してしまった感が否めません。

ここでは、名大祭が長い歴史の中で当初の理念を失ってしまったことが指摘されています。では、名大祭の当初の理念とは、どのようなものであったのでしょうか。次章からは、いわば名大祭の原風景を確認しながら、その変遷の様子をみていきたいと思います。

二、名大祭の誕生

◆名大祭以前の大学祭

名大祭は、一九六〇（昭和三五）年に始まりましたが、それ以前にも名古屋大学全体を対象とする大学祭がなかったわけではありません。

一九三九年に名古屋帝国大学として創立された名古屋大学の大学祭は、当初は「開学記念祭」として行われていました。実行委員会は組織されていましたが、主催者は名古屋大学であり、実行委員会が主催する現在の名大祭とは異なっています。開催時期は、一九五一年までは一月初旬でしたが、五二年から五月下旬もしくは六月上旬とされ、名大祭の初夏開催はここに由来しています。すでに仮装行列やファイヤーストーム、フォークダンスといった、のちに名大祭の名物となったイベントもあり、名大祭の原型をみることでできます。しかし、たとえば五六年のプログラムによれば、催しの数も少なく、しかもそれぞれの開催日時も場所もばらばらでした。そもそも、学部単位でも文化祭や体育行事が開催されており、むしろこちらの方が実質的な大学祭であったともいえます。



1956年度開学記念祭プログラム（名古屋大学大学文書資料室所蔵）

五七年からは「大学祭」と改称されました。この年のプログラムの「あとがき」には、それまでの開学記念祭の内容について、次のように評価されています。

今迄も、少しでもより素晴らしいものをと毎年毎年努力が繰り返えされて来ましたが、結果的にみて、それはタコ足大学の名にふさわしいバラバラの行事の羅列に終わっていた様です。そして、この行事の一番の眼目たるお互の間の交流と云う事は、市民の皆さんとはおろか学生相互間でもほとんど成果をあげ得なかつた様です。

名大祭が誕生する背景の一つを、ここにみる事ができます。

◆各学部文化祭・体育祭の統一

記念すべき第一回名大祭は、名古屋大学主催・名大祭実行委員会主管という形式で、一九六〇年六月三日（金）から六日

(月)にかけての四日間、鶴舞キャンパスおよび東山キャンパスをおもな会場として開催されました。また、開催日の前日にあたる六月二日の午後には前夜祭が、また最終日の六日には体育祭が行われました。

第一回名大祭のプログラム冊子(以下、パンフレットという)の巻頭には、名大祭実行委員長による次のような書き出しの巻頭言が掲載されています。

名大は俗に「タコの足大学」と言われてるように、全学がまとまって一つのことをするのはとてもむづかしいことです。毎年、何かあるごとに、その地理的な不便と全学的組織のない悲哀をつくづく感じます。しかし、今年こそ、それをつき破って、名古屋大学史上初のフェスティバルを六月三〜六日の四日間、東山、鶴舞を主会場に催すことになりました。

この文章からは、名大祭を全学的フェスティバルとして開催することへの強い期待と喜びを感じることができると思います。当時、名古屋大学では、工学部の東山地区への移転(一九五六年)を初めとして、経済学部と法学部の東山地区移転(一九五九年)が実現するとともに、一九六〇年五月には豊田講堂が完成するなど、東山キャンパスの整備・拡充が着々と進められ

ている時期でした。この点は、名大祭誕生の前提条件として第一に指摘しておく必要があると思います。すなわち、東山キャンパスへの集結といった地理的な環境が整いつつあるなかで、それ以前は各部局がそれぞれに開催していた文化祭や体育祭を全学統一的に開催できるようになったことが、名大祭誕生の一つの前提条件となつていのです。

しかし、当然のことながら、単なる地理的環境の改善という要因だけで名大の誕生を説明できるものでもありません。ここでは、名大祭誕生の時代背景として、一九五八年ごろから表面化したいわゆる「六〇年安保条約改定」をめぐる問題と、一九五九年の伊勢湾台風による被害の二つを取り上げておきたいと思ひます。

◆「六〇年安保条約改定」問題

「安保条約」とは、一九五二年四月に日本とアメリカ合衆国との間で交わされた日米安全保障条約（正確には「日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約」という）のことをいいます。この条約は、一言でいうと、日本国領土内の土地および施設を米国の基地として貸与する協定という性格をもつものでした。

その後、一九五五年ごろからアジア・アフリカ諸国での民族独立運動が盛んになったことをうけて、米国の対アジア政策に修正が加えられました。その内容は、アジア諸国に開発政策を

導入することによって民族独立闘争や社会革命の発生を未然に防ごうとするものであり、その一環としてアジア諸国のなかでの日本の地位を高めて、日本をアジア開発政策の拠点にしようとするものでした。そして、「六〇年安保条約改定」は、それまでの基地貸与協定としての安保条約を相互防衛条約としてレベルアップさせることをねらったものでした。

この安保条約改定に対しては、一九五九年春ごろから学者・文化人、政党、労働組合、市民団体など多くの団体が改定を阻止するための運動を繰り返しました。しかし結果的に、この安保条約は一九六〇年一月に改定されて新安保条約（「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」と「地位協定」（正確には「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第六条に基く施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定」）の調印が行なわれました。さらに、同年五月には、国会に五〇〇人の警察官が導入されるといふ異常事態のなかで強行採決が行なわれて、新安保条約の批准案と新協定の関連法案が可決されています。なお、この強行採決に対しては、六月の四日と一日の二度にわたってゼネストが実施され、それぞれ五六〇万人、五八二万人もの国民がストライキに参加しました。

この安保条約改定阻止の運動については、名古屋大学でも教養部学生自治会が中心となつて、全学連（全日本学生自治会総連合）や愛知県学連（愛知県学生自治会連合会）等の学外組織と

連携しながら、講演会や学生大会、デモ行進などを行なっています。とりわけ、さきに紹介した国会の強行採決以後は、「民主主義擁護」をスローガンに当時の岸信介内閣の総辞職や国会の解散を要求する全国的な運動が展開されるなかで、名古屋大学の多くの教職員・学生がそうした運動に積極的に参加するようになっていきます。

◆伊勢湾台風による被害

次に、名大祭誕生のもう一つの時代背景として、伊勢湾台風について述べておきます。一九五九年九月二二日、マリアナ群島の東で台風一五号が発生しました。この台風は、その翌日には中心気圧八九四hPa、最大瞬間風速七五mの超大型台風に発達して、二六日夕方には紀伊半島の潮岬に上陸して本州を北東方向に横断しました。伊勢湾岸地方にとって最悪の進路をたどったこの台風は、同日の夜半にかけて愛知・岐阜・三重の東海三県にきわめて大きな被害（死者・行方不明者四六三七人、全・半壊家屋および流失家屋約一七万戸、被災者総数約一三〇万人）を与え、伊勢湾台風と名づけられました。

この伊勢湾台風によって、名古屋大学でも校舎の被害、教職員・学生の被災などによって半月以上も授業や試験が中断され、教養部文化祭も中止されるといった事態になっています。なお、中止された文化祭に代えて、名古屋大学主催の被災学生救援のための音楽会が一月二六



伊勢湾台風の被害を受けた建物

日に名古屋市公会堂で開催されました。

また、被災した教職員や学生に対する学内関係者による救援活動も活発に行なわれました。それは、被災直後の救出・救援物資の補給や、その後の経済的・心理的なケアにいたるまで多面的かつ長期的なものであったといえます。なかでも被災の直後から救援活動を開始していた教養部学生自治会では、教養部学生災害対策本部を設けてのべ三〇〇〇人の学生参加を得て、運搬・連絡から遺体の収容といった過酷なものを含めた救援活動を展開しました。こうした献身的な学生の活動に対しては、多くの被災者から感謝の手紙が名古屋大学に寄せられました。また、愛知県議会も名古屋大学の教職員・学生に対する感謝決議を行なっています。

◆名大祭がめざしたもの

冒頭で紹介した第一回名大祭パンフレットの巻頭言には、次のような一節もあります。

私達学生は、「平和と民主主義、よりよき学生生活」を求めて、いわゆる学生運動をしています。名大祭も当然その一翼になうものです。マス・コミのかたよった報道によって、一般に学生運動の政治面のみがクローズアップされがちですが、——そしてまた、ともすれば、私達自身が、これにひきづられがちですが、——平和と民主主義を守る^{たたか}闘いは、こうした場でこそ、学生の本領が発揮出来るものと自負しています、すなわち反動的な学問、たいはいつ的な文化、体育を打ち破り、科学的な学問を確立し、創造的な文化、体育を生み出してゆくことです。この意味でも、名大祭が、全学的にもてたことを心から喜びかつ誇りに思います。

さきの引用部分とあわせ読むことよつて、東山キャンパスへの集結という地理的条件に加えて、当時の社会的背景を契機に高揚した「学生運動」のエネルギーを全学的に結集するという面で、名大祭の開催そのものが学生にとつては一つの象徴的な行事であつたといえるのではないのでしょうか。

三、時代を映す名大祭①——一九六〇年代

◆第一回〜第一〇回のテーマ

名大祭では、その年ごとにテーマが設定されています。たとえば、第一回名大祭のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて―日本人民の歴史づくりのために―」でした。また、第二回のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて―変革の時代における学生の立場と役割―」というものでした。

これら第一回・第二回では、メインテーマは同じですが、サブテーマが異なっています。こうしたテーマの設定は、「昨年からとびはなれた今年五月というのではなく、この一年間にひきつがれてきた学問、文化面の創造的活動の一拠点として、第一回に連結した第二回」という考えによるものでした（『第二回名大祭パンフレット』）。

名大祭一覧（一）として、第一回から第一〇回までの名大祭のテーマなどを示しておきます。この時期のテーマでは、「人民」「祖国」「民族」「連帯」「真理の砦」など今日ではあまり聞き慣れないことばが繰り返し使われています。これら一九六〇年代のテーマをみて、当時の名

大祭に対して読者の皆さんはどのような印象をもつのでしょうか。以下、本節では、一九六〇年代の名大祭テーマの背景や特徴について触れておきたいと思います。

◆時代背景—一九六〇年代

前章において、名大祭誕生の時代背景として、二つのことを紹介しました。一つは、六〇年安保条約改定をめぐる全国的な社会状況です。もう一つは、伊勢湾台風による被害とその救済活動という東海地方固有の社会状況です。

では、その後の一九六〇年代の社会情勢はどのようなものだったのでしょうか。ちょうど第一一回のパンフレットには、過去一〇回の名大祭を振り返った「名大祭の歩み」というコラムが掲載されています。少し長くなりますが、次に引用しておきます（カッコ内は引用者補注）。

六〇年安保闘争以後、学生運動の中に分裂と混乱が持ち込まれ、(第二回)名大祭も困難な状況に直面してゆきます。……(略)……学生運動分裂のあおりで、(第三回)名大祭は一時建設的、実践的な方向を見失いかけてましたが、新しい学生運動の芽は下からの盛り上がりとして、積極的に示されました。……(略)……(第四回名大祭では)全学フェスティバル、民族の心を呼ぶもの、など……(略)……創意性あふれる名大祭企画、活動が

名大祭一覧 (1)

回	開催年	開催日	メインテーマ／サブテーマ	名大祭の動き
1	1960年	6/2～6	日本人民のエネルギーマの継承と発展の方向を求めて／日本人民の歴史つくりのために	主催：名古屋大学、主管：名大祭実行委員会。会場は東山・鶴舞。
2	1961年	5/21、26～28	日本人民のエネルギーマの継承と発展の方向を求めて／変革の時代における学生の立場と役割	
3	1962年	5/13、27、30～6/3	戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう／新しい名古屋づくりのために	主催が名大祭実行委員会となる。会場が東山のみとなる。
4	1963年	5/30～6/2	祖国に平和を 大学に民主主義を きなくささとせながらささづいて 人民の輪の中に私たちの未来を築こう／私たちの新しい生き方を見いだすために	「体育祭」が「運動会」に。全学フェスティバル、「民族の心を呼ぶもの」はじまる。
5	1964年	5/26～31	胎動から躍動へ 祖国の痛みがさらにはげしくうずく今 ぼくらの連帯は巨歩を進める、さらにもう一歩前へ／民主的学問、民族性豊かな文化を創造する中で	
6	1965年	5/9、16、25～30	大学に新しいいぶきを ゆれ動く世界の中で 岐路に立つ我ら 逆流に抗して人民の輪を広げよう／生活に根ざした文化、平和のための学問を追求する中で	「模擬店」がパソソに登場。
7	1966年	5/22、29、6/7～12	築こう平和と真理のとりでを 風の中のアジア・祖国日本 深まりゆく大学の危機をついて 僕ら連帯の輪をさらに広げよう／大学が真に民族の課題に応えるために	
8	1967年	5/14、5/21、6/6～11	はばだけ創造のつばさ 反動の嵐の中 たちあがる人民と呼びかわし 学問・文化に力強い生命を／祖国の平和と豊かな学園生活をめざして	
9	1968年	6/4～9	この祖国に平和と民主主義を 我ら真理のとりでを築くもの たぎる力をよりあわせ 歴史をになう人民の隊列へ／学問・思想の自由を守り、「明治百年祭」を批判するなかで	「民族の心を呼ぶもの」が全学フェスティバルに吸収される。「運動会」が「球技大会」に。
10	1969年	6/4～8	磨け 祖国切り拓く 科学のメスを 我ら真理の哲きずくもの 従属の鎖たちぎる 統一の力今こそかたく／自主的活動を追求し、大学民主化を推進するなかで	

(各年の名大祭パソソレットより作成)

くりひろげられました。学生運動の統一と団結がすすめられ、「自治会はみんなのもの みんなの利益を守るもの」という方向がはつきりとしてきました。第五回名大祭は……(略)……第四回名大祭の新しい芽を伸し、「若者のつどい」「日朝友好のつどい」など学外他階層との連帯を一層強化する取り組みがふえました。……(略)……第六回名大祭ではアメリカの北爆が開始され、日「韓」条約が結ばれようとし、第七回では、全学ぐるみで日「韓」条約反対を叫びました。……(略)……第八回では……(略)……名大づくりが焦点になり、第九回名大祭は大学問題が国民的問題となる中で、市民との連帯、日常の学問研究活動の現状調査が強調されました。……(略)……(第一〇回名大祭では)大学ぐるみで「大学法」(「大学の運営に関する臨時措置法案」)に反対してゆく中で、大学の民主化、学問研究活動の発展めざしてとりくまれました。

右の引用文で述べられている「全学フェスティバル」「民族の心を呼ぶもの」「若者のつどい」などは、この時期の名大祭の特徴を示す企画であるといえます。これらを中心に、一九六〇年代の名大祭のおもな企画を簡単に説明しておきたいと思えます。

◆中心企画としてのテーマ関連講演会

この時期の名大祭において、テーマ関連の講演会をはじめとするテーマ関連の企画は、全学企画としてきわめて重要な位置づけを与えられていました。ここでは、第三回名大祭を例にして紹介しておきます。

第三回名大祭は、本祭の期間として四日間が設けられました。そして、この日程のなかでテーマ関連企画は、最終日を除く三日間の午前中に必ず実施されています。すなわち、初日の午前一〇時から午後一時まではテーマ講演会Ⅰとして「現代における学問の課題と大学の役割」（上原専祿二橋大学名誉教授）と「戦後における大学の形成と学生の諸問題」（井上清京都大学教授）の二講演、二日目の午前一〇時から正午まではテーマ講演会Ⅱとして「新しい名古屋大学の展望と我々の果すべき役割」（新村猛名古屋大学文学部長）の一講演、三日目の午前九時半から午後二時半までは全学シンポジウム「戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう―新しい名古屋大学づくりのために―」がそれぞれ行なわれます。

しかも、これらの全学企画が行なわれている時間帯には他の企画が行なわれておらず、文字どおり、すべての学生が参加できる企画としての形態をとっていることがわかります。

◆全学シンポジウム

これは、第一回名大祭から行なわれている全学企画で、原則として、テーマ講演会と密接に関連づけられて企画されています。たとえば、第四回のシンポジウムでは、事前に行なわれた学部別シンポジウムの内容についての各学部報告者によるレポート、それに対する助言者の発言、さらに名大祭テーマ講演の内容を軸としながら、学生が当面する諸問題や大学の役割などについて具体的な討論が行なわれたようです。

そうした点からも、当時、この企画は「名大祭の最初から全国にも珍しい積極的な、大衆的な思想運動として作りあげられ、『統一テーマを深める』ということを直接的に行なう、名大祭の軸、名大祭の魂ともいうべきもの」と位置づけられていました（『第四回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学シンポジウムは、第二回名大祭以降は実施されなくなっています。

◆全学フェスティバル

これは、「名大祭のテーマを中心にすえた、みんなの『やる名大祭』の企画」として、第四回名大祭から新たに設けられた全学的な企画です。「やる名大祭」とはいわゆる参加型の名大祭のことを意味しており、この全学フェスティバルでは、他大学の学生や市民の参加を得なが



第7回名大祭 若者の集い（第7回パンフレットより）

七八年）まで毎年開催されてきました。

◆民族の心と呼ぶもの

全学フェスティバルと同じく、第四回名大祭から始められた企画です。この「民族の心と呼ぶもの」は、民謡・落語・漫才などの日本の民俗芸能・大衆芸能に触れる機会を提供するものでした。この企画の背景には、「おしきせのアメリカ文化、植民地的文化でなく、日本には日本独自に発展した素晴らしい文化」があり、それら文化は『人民のいぶき』が感じられ私た

ら、演劇・合唱・演奏・踊り・スライドなどあらゆる手法を駆使して「バカデカクて愉快な」総合芸術の創造が追求されました。

この全学フェスティバルは、名大祭の最終日に豊田講堂で開催されるのが通例でした。たとえば、第七回名大祭の際には、二時間にもおよぶシナリオを全員で創作し、八〇〇名以上の出演者による合同演奏・合唱を行なってフィナーレを飾ったとされています（『第八回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学フェスティバルは、第一九回名大祭（一九

ちを真に心の底から感動させ、誇りを持たせる」ものであるという考えがあります（『第五回名大祭パンフレット』）。

なお、この「民族の心と呼ぶもの」は、第八回名大祭までは独立した企画として開催されていましたが、第九回名大祭の際に全学フェスティバルに吸収されています。

◆若者の集い

第五回名大祭から登場した「若者の集い」は、働く人（勤労青年）と学問する人（大学生）との交流の場を提供する企画として始められ、第一〇回名大祭まで開催されていました。この企画の初回のパンフレットには、次のような開催趣旨が掲載されています（『第五回名大祭パンフレット』）。

人間の生活で最も神聖であるべき労働に関し、現状は、労働者を金に換算出来る商品として人命を軽視し、自由化に対する措置と称して、合理化の名目で多数の労働者の首をわずかの金で首を切り、大会社同士は合併し、大財閥の出現、その反面中小企業の倒産、物価の上昇など、若者の疑問と不満は大きい。それに一方、学生には……（略）……学生の正当な権利と自治が制限され侵されている現状を真剣に話し合う必要があると思います。

働く人と学問する人との間にある人間らしく生きる権利に関し今迄、相方があまりに両方が無関心だった事を改め、……(略)……：本当の労働の意義、学問の意義を追求する中で、皆な若者は友達であり仲間である事を再認識し、すばらしい若者の若さで僕達の世界を作ろうではありませんか。

◆一九六〇年代の名大祭

この時期の名大祭テーマは、学生運動との深い結びつきを基本に、国内外の情勢も視野に入れたさまざまな政治・社会問題に敏感に反応したものであったということが出来ます。当時の学生は、名大祭を学生のさまざまな要求実現の場であるとともに、学外の一般市民との交流・連帯の場であると位置づけていたのです。その意味において、名大祭は一定の緊張感をともなう場であったともいえるでしょう。

時期的には少しずれがありますが、一九七一年に開催された第一二回名大祭パンフレットにおいて、芦田淳学長は、「名大祭は読んで字が示すように、『おまつり』であります。人間は緊張の連続で生きられるものではありません。楽しみも織りこんだものであつてほしいと思います。」とのメッセージを寄せています。このメッセージの背景には、一九六〇年代の名大祭が緊張感をともなう場としての性格を強くもつていたことをうかがわせます。



名大祭パンフレット表紙 (第11・12回)

四、時代を映す名大祭②—一九七〇年代

◆第一一回～第二〇回のテーマ

名大祭一覽(②)には、一九七〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。一九六〇年代のテーマと比較すると、メインテーマが短くなっている一方で、サブテーマが長くなっています。また、この期間のほとんどのメインテーマでは、「青春」や「歌」がキーワードになっているといえます。

この時期は、いわゆる「大学紛争」が鎮静化した時期にあたります。名古屋大学でも、鶴舞キャンパスでの「医学部紛争」を一つの契機として、東山キャンパスでの「大学紛争」が一九六〇年代末に起こりましたが、この時期にはすでに沈静化していま

名大祭一覧 (2)

回	開催年	開催日	メインテーマ／サブテーマ	名大祭の動き
11	1970年	5/30、6/10～14	変革にいとむ青春／新しい歴史敵愾に迎える我ら 理への情熱を燃やし 統一と国結を鉄炮を鍛えん 怒れ知性燃えあがる日本列島／真理究めるわれら 巻く濁流をついて 平和と民主主義の統一をめざさん	「スポーツ祭典」が「大運動会」に。
12	1971年	6/9～13	高らかに歌え！ 青春の叙事詩／迫りくる嵐そして霧 我ら勇敢な「海つばめ」たらん	「徹夜ステータ祭典」はじまる。運動会が事実上消滅。名大祭統一普及曲の選定がはじまる。山田杯駅伝大会はじまる。
13	1972年	5/28、6/7～11	日々新たなる青春の復讐を／生ける科学の草の根よ 雄々しく育って 行く手を阻む 巨岩を砕け	
14	1973年	6/6～10	大学ににんげんのうたを／それは模索し発展する科学 のうた 語らい呼びかわす連帯のうた 培い勵まし合 い国民のための日本をつくる変革のうた	
15	1974年	6/5～9	ひきしばれ青春の弓／射よ嵐の目に 熱き鋼の矢を	
16	1975年	6/4～8	響け われらのロンド／吹きぬげる科学の烈風 を裂け わきあがれ大地に 建設のエネルギー	
17	1976年	6/9～13	湧きあがれ 学問と変革のソノフオニー／ひたむきな 歴史の探索と 確信への追求から 今生み出される明 日への飛翔 我が学舎と 当惑する祖国に	第2グリーンソングベルトでグリーンソング祭典復活。
18	1977年	6/8～12	我らの手で真の科学を／我ら数多なる知の泉、歴史の 大河にそそぎ 深き流れとなりて逆流をつき破らん	フェスティバルはじまる。スポーツ祭典復活。
19	1978年	6/7～11		
20	1979年	6/5～10	知を力に 逆風に対峙し奏でよう 変革の前奏曲	『名大生白書』発行はじまる。この年から6日開催となる。全学フェスティバルなくなる。オーケストラフェスティバル、ライナーレフェスティバルはじまる。

(各年の名大祭ソングレットより作成)

した。一九七〇年以降、名大祭のテーマ表現が明らかにそれ以前と異なっている背景には、そうした事情があったといえます。

◆一九七〇年代の名大祭テーマアピール

この時期の名大祭パンフレットに掲載されたテーマアピールに目を向けると、当時の社会情勢やそれに対する学生の認識がとてよく理解できます。以下に、そのいくつかを紹介していきます。

人間らしく生きたい——僕たちはいつもそう思う。人間らしく生きる——こんなあたりまえにみえることが決して容易ではない、僕たちの時代。小学校の門を、小さな胸をふくらませてくぐった、その時に先ず知らされた「できる子」「できない子」という言葉。中学校時代、受験時代の差別と選別の教育のなかで、見えるものに目をつぶり、聞こえるものに耳をふさいで「死なないように生きる」ことを強いられてきた僕たち。……(略)……「青春」と「信頼」、この二つの言葉を持つ、本来の輝きと「美しさ」が失われて久しいけれど、僕たちは知ってはいないか。「こんな『青春』でない、別の『青春』がもつとほかのところにあるはずだ」「こんなばらばらな僕たちだけれど、そんな僕たちだけ

『信頼』できる友達がほしい」そんな願いと、言葉の持つ「美しさ」、言葉への信頼をとりもどす願いをこめて、……(略)……第一四回名大祭ははじまる。

(『第一四回名大祭パンフレット』)

僕たちの学問は、国民生活との関わりを無視しては考えられない。「何のために学ぶのか」という問いかけ。この学生としての僕たちにとつて最も真摯な問いに、「国民のための大学」という言葉をもつて、何らかの方向性が与えられはしないか。僕たちはそれを今年の名大祭でめざしたいと思う。学生に共通の基盤の一つは「真理を究める」ということだ。……(略)……しかし自分のまわりをながめてみると、その最も基本的な基盤さえ、今非常に脆弱なものとなつてしまつていることを感じる。……(略)……どう見ても将来への展望がわいてこない社会の現状。不公平と不正が横行し、強い者はあくまで強く、弱い者が徹底的にいじめぬかれる今の世の中、真理の存在すらが疑わしくなる日常の生活で、ともすればその日常に慣らされてしまいながら、それでも満足できず、僕たちは今確かなものを掴みたいと願つて……(略)……

(『第一九回名大祭パンフレット』)



名大祭フォークダンス風景（『第13回名大祭パンフレット』より）

これらのテーマアピールには、一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期のなかで、受験競争社会をくぐり抜けてきた学生の真情が示されていると思われます。

五、時代を映す名大祭③——一九八〇年代

◆テーマの簡潔化

名大祭一覽(③)には、一九八〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。第二二回名大祭以降は、サブテーマが設けられなくなっている点に一つの特徴があります。また、もう一つの特徴として、すでに一九七〇年代からみられたメインテーマが短くなる傾向が、この時期になってさらに強まったという点にあります。

◆「学長あいさつ」からみた名大祭

テーマが簡潔化されるということは、その内容が抽象化されていることを意味します。『広辞苑』(第六版)によると、「抽象的」とは「現実から離れて具体性を欠いているさま」であるとされています。では、この時期におけるテーマの簡素化は、現実の名大祭の具体性とどのような関係にあったのでしょうか。

名大祭一覧 (3)

回	開催年	開催日	メインテーマ/サブテーマ	名大祭の動き
21	1980年	6/10～15	輝け 我ら知の銀河/押し寄せる暗闇 エネルギー 込み上げる胸の疼き 熱き炎となりて未来を燃やし 学術文化と連帯の力だからに 創り上げる希望と変革の大地を	模擬店がグリーンベルト方面に進出。
22	1981年	6/9～14	われらとわれらの子孫のために	全学シンポジウムなくなる。「タモリオンスデー」開催。青空カーニバルはじまる。
23	1982年	6/8～13	輝く地球と未来をわれらで	「アズチユアバンドコンサート」はじまる。バンブのテーマアデーラ簡略化傾向強まる。
24	1983年	6/7～12	改造	バンブから名大の歴史のページがなくなる、教養部新企画としてチャリテイバザー開催。
25	1984年	6/5～10	反攻	
26	1985年	6/4～9	刻みこめ 青春の鼓動を 新たなる胎動に	名大祭統一普及曲の選定がなくなる。「オムニバス企画」「有志企画」のカテゴリー登場。
27	1986年	6/10～15	熱帯雨林、諸子百家	この回のみ全学シンポジウム復活(平和憲章制定アデーラ)
28	1987年	6/9～14	脱	飯島学長がバンブに叱咤激励の文章を寄せる。
29	1988年	6/7～12	我がまま開発	名大祭本部実行委員会から名大祭短縮の危機をうったえる緊急提言。
30	1989年	6/7～11	すばらしい	この年から5日開催となる。オーブニングフェスティバル、フイナーレフェスティバルがなくなる。模擬店出店123団体。

(各年の名大祭のレポートより作成)

諸君、今年の名大祭のテーマをえらんで、「脱」という。それがたんなる逃避に非ず、消極的な過去の便宜的清算に非ず、むしろ飛躍して視野を広め、名実ともに充実し、自己を呪縛から解放し、以て大いにはばたく契機たらしようとするためには、ここにいかなる祭典を持つべきか。テーマがいたずらに名大祭の実態から遊離し、たんなる飾りとして終わらないためにも、私はあえて名大祭の実態を諸君に問いたい。……(略)……名大祭は、名古屋大学の祭りであり、名古屋大学学生の祭典である。卑小と幼稚な自己陶醉をさらけ出して、それを祭りとして恥じないようなおろかさは、万々諸君のなかには存在しないと信じるが、呉々も名大祭を大切にしてくれたまえ。今年の名大祭に「脱」の精神がいかにつらぬかれ、いかに表現されるか、私は期待をもつて見守る。名大祭に幸あれ。

これは、第二八回名大祭パンフレットに掲載された飯島宗一学長のあいさつ「名大祭に寄せらる」にある一節です。ここには、名大祭のあり方に対して警鐘を鳴らしながらも、期待を寄せる学長の真情が示されているように思います。

◆テーマ企画の減少

一九七〇年代以前の名大祭では、毎年決められるテーマがその年の名大祭そのものを規定す

るほどの性格をもっていました。したがって、名大祭ではそのテーマに直接に関連する中心的な企画が行なわれることが当然であるという認識が当時の学生にはあったのだと思います。

実際、当初の名大祭ではその年のテーマに関連した講演会・討論会やシンポジウムが大々的に開催されていました。むしろ、そうした学術的あるいは文化的な企画が中心に据えられたうえで、各学部企画・サークル企画やアトラクションなどの周辺的な企画が展開されていたといえます。

しかしながら、時代の推移とともに、状況は少しずつ変化しています。たとえば、名大祭テーマに真正面から取り組む講演会やシンポジウムなどの全学企画は、第二一回名大祭以降は次第に行なわれなくなっています。ただし、誤解を避けるために述べておきますが、一九八〇年代以降にすべての全学企画がなくなってしまったわけではありません。もちろん、第二二回以降にも全学的な「テーマ」企画は行なわれています。しかし、それらのほとんどは、名大祭テーマとは直接的な関連を必ずしも持たない「テーマ」を扱った講演会やシンポジウムとなっています。

◆一九八〇年代名大祭の特徴

第二六回名大祭パンフレットの目次には、「オムニバス企画」という項目が登場します。こ



第27回名大祭風景（『87名古屋大学卒業アルバム』より）

の項目に掲載されている企画をみると、いくつかの新しい企画もある一方で、一九七〇年代や一九六〇年代から行なわれてきた伝統的な企画が多く含まれていることに気づきます。ここに、この時期の名大祭の特徴の一つを見出すことができると考えられます。

「オムニバス」という語は、「映画などで、いくつかの独立した短編を並べて一つの作品にしたもの」を意味します。名大祭では、第一回当時から限られた日程のなかで数多くの企画が行なわれてきました。その点からみると、名大祭そのものが一つのオムニバスであるといえるかもしれません。しかし、学生運動の高まりを背景に展開された一九六〇年代における名大祭では、エネルギーの結集や連帯がキーワードとされるなかで、さまざまな企画が一つのテーマ

を共有しながら全体としての名大祭が形づくられていたという印象を強く受けます。こうした傾向は、一九七〇年代における名大祭においても共通していると思います。

これに対して、「多様化の時代」といわれた一九八〇年代に入ると、次第に状況は変わってきたようです。一九八三（昭和五八）年の第二四回名大祭パンフレットには、本部実行委員長による次のようなあいさつ文が掲載されています。

青年向けの情報誌や娯楽雑誌などに見られる、祭としての要素のみが強調されてきた大
学祭像によつて、ともすれば見失われがちな大学祭の役割を、私たちは、今、もう一度思
い起こしてみなければなりません。

さきに紹介した飯島学長による第二八回名大祭あいさつとこの指摘をあわせ読むと、この時期の名大祭が、抽象化されたテーマのもとで、よい意味で統制されることもなく、単に「オムニバス」的な傾向を強めていたことが浮き彫りにされるのではないでしょうか。

六、時代を映す名大祭④―一九九〇年代

◆第三一回〜第四〇回のテーマ

名大祭一覽（4）には、一九九〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期は、一九九七（平成九）年の第三八回名大祭を除くと、一九八〇年代のそれとほぼ同様にサブテーマを設けることなく比較的短いメインテーマが続いています。

◆「お祭り企画」の増加

この時期の名大祭の動向を象徴的に示していると思われることの一つとして、「お祭り企画」という項目がパンフレットに登場するとともに、その企画数が増加傾向にあることを指摘できます。この項目は、第三一回名大祭パンフレットで新たに設けられて以降、第三六回パンフレットまで連続して設けられています。この「お祭り企画」という用語から、前章で紹介した飯島学長のあいさつ文を連想した読者も少なくないと思います。当然のことながら、右に述べた各パンフレットでは、「お祭り企画」のほかに、「学術企画」「学部祭」「有志企画」など

名大祭一覧 (4)

回	開催年	開催日	メインテーマ/サブテーマ	名大祭の動き
31	1990年	6/6～10	文明の育ての親と生みの親である。	テーマ企画この回のみ復活。フオーグダンス企画消える。「お祭り企画」のカテゴリー登場。「徹夜スケート祭典」が「All Night Skating」に。歌声祭典、子供大会なくなる。合同合唱祭はじまる。
32	1991年	6/5～9	未来への足跡	
33	1992年	6/10～14	腐った鯛、原石のダイヤ	フリーマーケットが本部実行委企画としてパブリックに掲載される。豊講前特設ステージでアラブチェアバンドコンサートとグリーンソングスイベントが開催される。
34	1993年	6/9～13	卵からかえる瞬間	模擬店112店。
35	1994年	6/8～12	種まいて、水かけて、	オーブニソングセレモニーがはじまる。豊講前特設ステージ再登場。名大祭教養部実行委員会が名大祭一・二年生実行委員会となる。
36	1995年	6/7～11	夢見る頃を過ぎて…今こそ動き出すとき	
37	1996年	6/5～9	カニ	「お祭り企画」カテゴリーなくなり、ジャンル別分類に。
38	1997年	6/11～15	くさった学生。くさった教授。／真の大学改革を目指して	テーマをめぐって実行委と大学側が折衝。サブテーマを「21世紀への挑戦状」から変更。「テーマ企画」がこの年限定で復活。
39	1998年	6/10～14	崖っぷち	模擬店133店。
40	1999年	6/9～13	0からの創造	名大祭本部実行委員会が「名大祭ごみ非常事態宣言」。

(各年の名大祭パブリックより作成)



第31回名大祭 仮装行列（『'94名古屋大学卒業記念アルバム』より）

の項目があります。この「お祭り企画」という表記には、一体どのような意味が込められているのでしょうか。

この点に関しては、名大祭関連の学内資料をみると、一九八〇年代後半ごろから名大祭に参加する学生数（とりわけ学部学生）が減少する傾向にあり、まさに一九九〇年代前半ごろは本部実行委員会側が〈学生層を引き戻す、魅力ある名大祭づくり〉を懸命に模索していたことがわかります。「お祭り企画」による魅力の強化ということの是非はともかく、名大生の多くが参加しない名大祭に対する一種の危機意識が読み取れるのではないのでしょうか。

◆第三八回名大祭テーマ

ここで、この時期の名大祭では異色な第三八回（一九九七年）のテーマについて、簡単に説明をしておきます。

「くさった学生。くさった教授。」というメインテーマは、その大胆さが議論を巻き起こし、新聞にも取り上げられました。このメインテーマには、当初「二一世紀への挑戦状」というサブテーマがつけられていましたが、最終的には「真の大学改革を目指して」という表現に改められています。

なお、この第三八回のテーマは、翌年のテーマ「崖^{がけ}つぷち」にも影響を与えていることが次の文章からもわかります（『第三九回名大祭パンフレット』テーマアピール）。

前回、……（略）……大学における学生教授双方の無気力さに対して一つの警告がなされました。しかし、……（略）……改善に向けての行動を起こした学生は教授はいつたいいかにかりたでしょう。問題意識を失った大学はもはや「崖^{がけ}つぷち」状態にあるといえます。しかし、このあと一步の「崖^{がけ}つぷち」状態で踏み留まり、この状態を脱しなければなりません。そのために何が重要なのか。今こそ学生教授一人一人自覚し、さらなる飛躍を目指そう。

「くさった学生 くさった教授」

大学の現状 過激に表現

学生は「人・社会」を軸に、教授は「学問」を軸に、それぞれ異なる視点から大学の現状を捉えている。この対立は、大学改革の議論を激しくしている。学生側は「くさった教授」として、教授側は「くさった学生」として、互いに批判を浴びている。この対立は、大学の改革を促す一歩を踏み出したと言える。

名大祭のテーマ

学生投票でダントツ

教授側は一時反発



「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

■ テーマの最終候補と投票結果

くさった学生 153票
 くさった教授 102票
 ※サテライトは「21世紀への挑戦状」を
 「風の大学改革を目指して」に変更
 102票
 14票
 18票
 51票

投票総数

森嶋・京大を教壇の語 大学というものは一種の文化的環境だ。清潔潔白ではなく、多少は「腐った」ところもある。その部分を排除するのは、いかにも取り込んでいくのが必要だろう。いゆる全全期時代では、学生とも教授側にもラップ活動的な力があった。大学に期待するのは、大学は自分の生き方を見つけるために利用する場だった。それが、ただだんぜんさげなくなり、学生も教授も型にはまってきた。

「くさった学生、くさった教授」というテーマに教授側が反論するのやほだと思ふ。この企画がまじめ一本格的な大学をつくるのではなく、学生や教授の幅を広げる方向に進み、名大が文化的に豊かな場になってほしいと願う。

「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

「くさった学生、くさった教授」をテーマとした投票結果。学生側は「くさった教授」を、教授側は「くさった学生」をそれぞれ選んだ。この結果は、大学の現状に対する両者の不満を示している。

七、時代を映す名大祭⑤—2000年代

◆第四一回〜第五〇回のテーマ

名大祭一覽(5)に、二〇〇〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期の特徴は、テーマの単語化です。一九九〇年代のテーマの多くは、短いといってもフレーズであったのに対して、二〇〇〇年代のテーマは、ほとんどが単語になっています。

さらに、二〇〇二(平成一四)年には、それまでパンフレットにおけるテーマの説明文に必ず冠せられていた「テーマアピール」の語が消えました。すでにテーマアピールの簡略化が進行しており、テーマのメッセージ性の低下が顕著になっていましたが、ついにテーマは強いてアピールするものではなくなつたのです。このことを象徴するかのように、この二〇〇二年から、「テーマキャラクター」が毎年選定されるようになりました。

第一章で、二〇〇二年の第四三回名大祭のパンフレットに掲載された、名大祭から理念が喪失したことを指摘した本部実行委員会委員長のコメントを紹介しましたが、それに続けて次のように書かれています。

名大祭一覧 (5)

回	開催年	開催日	メインテーマ/サブテーマ	名大祭の動き
41	2000年	6/7～11	好きです、名大	エコツアー（スタンプラリー）はじまる。スケート企画の名称が「徹夜でスケート」となる。
42	2001年	6/6～10	白地図	
43	2002年	6/5～9	飛翔	「テーマアビール」の語が消える。テーマキャラクターの選定はじまる。 「アヤチユアバンドコンサート」なくなる。 「地域社会との調和と交流」の取組みはじまる。
44	2003年	6/4～8	夢空間	
45	2004年	6/3～6	活	
46	2005年	6/2～5	道草	
47	2006年	6/1～4	夢源	バリアフリーへの取り組み本格化。この年の第30回を最後に、グリーンフェスティバル終わる。盆おどり企画はじまる。
48	2007年	6/7～10	彩幻～サイゼン～	
49	2008年	6/5～8	夢滴	食中毒事件発生。
50	2009年	6/4～7	愛されて、はんせいき	飲食店全面自粛、スケート企画が徹夜ではなくなる。 飲食店、数を縮小して復活。「オーブンソングセレモニー」から「オーブンソング企画」へ。 フレイヤーストームなくなる。
51	2010年	6/3～6	だって、笑顔でいたいじゃない	

(各年の名大祭パンフレットより作成)



第48回（テーマ「彩幻～サイゲン～」）
のテーマキャラクター「サイタ」

しかし私は逆に第一回から変わっていない部分もあると思っています。それは名大祭の開催による「非日常空間」の創出です。（中略）「非日常の空間」である名大祭において皆さんが今まで知らなかった自分を発見したり、従来とはまた違った考えかた・価値観を発見することで自分の中の新たな可能性をきつと見出すことができるでしょう。

この見解にならうかのように、これ以降の名大祭のテーマに、「夢」や「幻」といった非日常（非現実？）的な用語が多用されるようになりました。

◆エコロジーとバリアフリーへの取り組み

一九九九（平成一一）年の第四〇回名大祭のパンフレットに、名大祭本部実行委員会による「名大祭ごみ非常事態宣言」が掲載されました。名大祭が大量消費・大量廃棄を繰り返してきたことを反省し、このスタイルから脱却して、新しい大学祭像を構築するため、ごみの減量、



「ごみステーション」(第51回名大祭)

リサイクルなどの環境プロジェクトを実施することを宣言したのです。これは、同じ年の二月に名古屋市が発した、「名古屋市ごみ非常事態宣言」に触発されたものでした。

この年は、ごみの分別ルールをつくり、これを企画運営者、一般客を問わず、名大祭に関わる全ての人に呼びかけました。翌二〇〇〇年には、ごみの減量化とリサイクルの徹底をはかるため、ふだんの名古屋大学よりも細かい分別をおこなう「リサイクルステーション」を設けました。これは、「ごみステーション」として現在も続けられています。さらにこの二〇〇〇年には、名大祭特別企画としてこの二〇〇〇年形式で名古屋大学内のエコポイントを回るもので、二〇〇五年の第四六回まで続けられました。

名古屋大学は、二〇〇〇年に全国の大学に先駆けて「名古屋大学ごみ減量化宣言」をおこな

い、大幅なごみの減量に成功しましたが、名大祭はそれにさらに先駆けて取り組みをはじめたとはいえるでしょう。

また、二〇〇五年の第四六回からは、「バリアフリー情報マップ」がパンフレットに掲載されるなど、バリアフリーへの取り組みが本格化しました。二〇〇九年の第五〇回をみますと、情報マップのほかに、「授乳・おむつ換えスペース」の設置や、身体障がい者や高齢者、子ども連れでも参加しやすい「バリアフリー企画」の表示など、さらに充実しています。

◆地域社会との調和と交流

名古屋大学関係者だけではなく市民に広く開かれ、多くの来場者でにぎわう名大祭ですが、近隣住民の皆さんとの関係もそれに劣らず大切です。近辺の宅地化がさらに進むなか、早朝・夜間の準備・撤収作業や当日のステージなどの騒音、路上駐車の問題などに対して、苦情や厳しい意見が寄せられるようになりました。

そこで二〇〇三年の第四四回から、「地域社会との調和と交流」と銘打つての取り組みが始まりました。スピーカー音量の制限、準備作業や撤収作業の時間帯の見直し、名大祭後の打ち上げの禁止、住民の皆さんとの懇談会や挨拶まわりなど、さまざまな対応がなされています。まだ完全に問題を解決することはできていませんが、しだいに皆さんのご理解が得られつつあ

るようです。

また、二〇〇六年の第四七回からは、「地域を巻き込む名大祭」をテーマに、近隣住民の方々が参加しやすい名大祭を目標にしました。そこでこの年に生まれた（初期の名大祭にもあったので、正確には復活）のが盆踊り企画です。名大祭一日目（木曜日）の夕方に、「第一回盆おDori〜名大祭にこやあ!!〜」と題して行なわれました。この盆踊り企画は毎年好評で、名前を変えつつも現在まで続き、名大祭の定番企画になりつつあります。

◆伝統企画の終えん

二〇〇〇（平成一二）年以降の名大祭にみられる現象として、これまで時代の変遷にもかかわらず続いてきた企画などが姿を消したり、やり方の修正をよぎなくされたことがあります。

先ほどふれたテーマアピールという言葉が消えたこともその一つです。また、二〇〇三年の第四四回からは、一九八二（昭和五七）年から始まった「アマチュアバンドコンサート」の名前が消え、一九七七年から三〇回を数えたグリーン（ベルト）フェスティバルも、二〇〇六年が最後となりました。二〇〇九年の第五〇回には、一九七二年の第一三回から始まり、呼び方をさまざまに変えつつも続いてきた徹夜スケート企画が、徹夜ではなくなりました。

そして、二〇一〇年の第五一回には、名大祭の前の開学記念祭の時代から、あるいは名古屋

大学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校などの歴史をひもとけば、戦前から行なわれてきたファイヤーストームがなくなりました。

名大祭は名大生によってつくられるものであり、名大生の意識や関心の変化にともなつて企画の内容も変わっていくことは当然だと思います。ただ、名大祭初期以来の行事がなくなりつつあるのは、少しさびしい氣もします。

◆食中毒事件

さて、二〇〇〇年代の名大祭を語るに、残念なことではありますが、このことにふれないわけにはいかないでしょう。二〇〇八年の第四九回名大祭で発生した食中毒事件です。

三日目の六月七日（土）の午後、腹痛や嘔吐などの症状をうったえる名大生や来場者が続出、救急車で病院に搬送され、名大祭の会場は騒然となりました。この日の全企画は即刻中止され、名大祭本部実行委員会三年生役員が協議した結果、翌八日の全企画も中止となったのです。

名古屋市による調査の結果、黄色ブドウ球菌による食中毒で、原因は模擬店の一つで販売されたクレープであることが分かりました。被害者は、最終的に七七人に及びました。この事件は、テレビや新聞などで大きく報道され、名古屋市民に大きな衝撃を与えました。食中毒の直接的な要因は、本来名大祭では禁止されているはずの、当日より前の事前調理によるものでし



名大祭食中毒事件を報じる新聞
(中日新聞2008年6月8日)

たが、名大祭が開催される六月初旬といえは食中毒の発生しやすい時期だけに、名大祭の衛生管理のあり方そのものが問われました。

結局、翌二〇〇九年は、飲食関係の模擬店をいつさい禁止する措置がとられました。

そして二〇一〇年から、衛生管理体制を厳格にし、平日の模擬店および模擬店以外での取り扱い食品を既製品に限定、店舗数も大きく減らしたうえで、再開となりました。大幅に規模が縮小された模擬店ですが、相変わらずの人気ぶりで、土曜日曜はエリアが来場者でうめつくされていました。

◆愛されて、半世紀

そして二〇〇九（平成二一）年、名大祭は五〇回目を迎えました。テーマもそれにちなんだ「愛されて、半世紀」が選ばれました。

この年、名大祭本部実行委員会委員長は、パンフレットの挨拶文で、「第五〇回名大祭はゼロからのスタートというよりもマイナスからのスタートでした。」と書いています。一九九九年の第四〇回のテーマは「0からの創造」でしたが、今回は前年の事件によってうけた痛手をもなつてのスタートとなりました。

しかし同時に、委員長は次のようにも述べています。

一九六〇年に第一回が行われた名大祭も半世紀という長い歳月を経て様々に変化し、当初の理念は薄れ、イベント化が進んでいます。しかし、このように変化し続ける名大祭の過去四九回どれ一つを取っても、名大祭が皆さまに愛されてきた、という事実だけは変わりありません。これは、名大祭が誇りにするべき伝統だと思えます。

この年、来場者数は約三万五千人と、例年より約一万五千人減少しました。このことは、現在の名大祭における模擬店の存在の大きさを示しています。ただその一方で、模擬店（飲食店）が日本の大学祭の代名詞にすらなっている今日、この模擬店が全くない名大祭が、さらに新型インフルエンザが日本でも取り沙汰されていた時期にもかかわらず、これだけの来場者を集めることができたことは、むしろ高く評価されるべきではないでしょうか。

おわりに―名大祭の未来―

これまで本書では、一九六〇年から二〇一〇年までの、五一回の名大祭の変遷をたどってきました。初期の名大祭は、政治的な理念をテーマに掲げ、そのテーマを追究することを目標に行なわれていました。これに対して最近の名大祭は、理念を失い、娯楽化・イベント化しているとよく指摘されます。

しかし、最近二〇年の名大祭パンフレットにおける本部実行委員会委員長の挨拶文からは、そういった指摘をうけて、名大祭の意義を再定義・再発見しようという意図を見て取ることができます。

そこで見出された名大祭の意義の一つは、さまざまな可能性を求めるための、非日常を演出した空間であることです。たとえば、一九九〇（平成二）年の第三一回のパンフレットには、「祭は日常の細かい規則などというものを忘れ、楽しく非現実的な空間を創り出すことに意義がある。」と述べられています。この考え方は、一九六〇～七〇年代における学生の名大祭像とは明らかに異なっています。そして、名大祭の意義を「非日常」に求めようという傾向が、

とくに二〇〇〇年代に入って顕著になったことは、すでに前章で見た通りです。

もう一つは、市民の皆さんを含めた参加者の交流です。二〇〇一年の第四二回のパンフレットには、「近年の名大祭には万人が気軽に集い、そのエネルギーを結集し、参加者皆が交流できる場があります。」と書かれていますし、前章でみた第五〇回のテーマ「愛されて、半世紀」は、多くの人々に愛されてきたことを名大祭の誇るべき伝統として位置づけたものでした。こうしてみると、名大祭から理念が全く失われたわけではありません。また、最近の名大祭も、エコロジーやバリアフリーといった、社会の趨勢をいち早く取り入れた大きな取り組みを展開しており、現実から目をそむけていないわけではないのです。

名大祭はこういうものでなければならぬという、固定された名大祭像が必要であるとは思いませんが、全く規範のない祭典が、これから長い歴史を刻んではいけないでしょう。もとより、本書はそうした規範を提示することを目的とはしておらず、それは名大祭本部実行委員会を中心とした本学の構成員が智慧を出しあって創り出していくものだと思います。ただ、そのヒントは、すでに本書で取り上げた名大祭の歴史の中にもあるのではないのでしょうか。

引用文献・主要参考文献

第一回～第五一回の名大祭パンフレット（プログラム）

「名大祭実施結果報告書」（第二九回以降、一九八八年～）

『朝日新聞』（一九九七年四月二十九日）

『中日新聞』（二〇〇八年六月八日）

名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史二（名古屋大学、一九九五年）

『名古屋大学学生便覧』（各年度版、一九五〇年～）

日高六郎『一九六〇年五月一九日』（岩波新書、一九六〇年）

名古屋市総務局調査課編『伊勢湾台風災害誌』（名古屋市、一九六一年）

『名古屋大学 昭和三一年度開学記念祭プログラム』

『名古屋大学 昭和三二年度大学祭プログラム』

著者略歴

山口 拓史 (やまぐち たくじ)

一九六二年 兵庫県神戸市生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学研究科

博士課程(後期課程)単位取得

満期退学 教育学修士

現在 愛知医科大学アーカイブズ学務監(講師待遇)

専攻 アーカイブズ学、高等教育史

堀田 慎一郎 (ほった しんいちろう)

一九六九年 愛知県豊橋市生まれ

二〇〇〇年 名古屋大学大学院文学研究科

博士課程(後期課程)修了

歴史学博士

現在 名古屋大学文学書資料室助教

専攻 日本近代史、アーカイブズ学

【執筆担当】

三〇六：山口、はじめに・一・七：堀田、

二・おわりに：山口・堀田

名大史ブックレット14

名大祭 ―― 五〇年のあゆみ ――

二〇一一年三月三十一日 第一刷発行

著者 山口 拓史

堀田 慎一郎

編集発行 名古屋大学文学書資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二(七八九)二〇四六

印刷所 株式会社 クイックス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九―二〇

電話 〇五二(八七二)九一九〇

名大史ブックレット

シリーズ 既刊本

-
- | | | | |
|---|-------------------|-------|-----------|
| ① | これまでの大学院・これからの大学院 | 山口 拓史 | 2000年12月刊 |
|---|-------------------|-------|-----------|
-
- | | | | |
|---|-----------------------|------|----------|
| ② | 名古屋大学 キャンパスの歴史1 (学部編) | 神谷 智 | 2001年2月刊 |
|---|-----------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|---------------|-------|----------|
| ③ | 名古屋大学 スポーツの歩み | 高橋 義雄 | 2001年3月刊 |
|---|---------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|------------------------|-----------|-----------|
| ④ | 豊田講堂と古川図書館—名古屋大学の寄付建物— | 堀田典裕・木方十根 | 2001年12月刊 |
|---|------------------------|-----------|-----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------------|-------|----------|
| ⑤ | 名古屋大学最初の外国人教師—ヨングハンス先生とローレツ先生— | 加藤 鉦治 | 2002年3月刊 |
|---|--------------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------|------|----------|
| ⑥ | 草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治 | 神谷 智 | 2003年3月刊 |
|---|--------------------|------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------|-------|----------|
| ⑦ | 名大祭—四〇年のあゆみ— | 山口 拓史 | 2003年3月刊 |
|---|--------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|-------------------------|-------|----------|
| ⑧ | 岡崎高等師範学校—新制名古屋大学の包括学校③— | 山口 拓史 | 2004年3月刊 |
|---|-------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------------|-------------|------------------------|
| ⑨ | 豊田講堂— <i>Toyoda Auditorium</i> — | 山口 拓史・堀田慎一郎 | 2004年9月刊
2010年3月増補刊 |
|---|----------------------------------|-------------|------------------------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------|-------|----------|
| ⑩ | 名古屋高等商業学校—新制名古屋大学の包括学校②— | 堀田慎一郎 | 2005年3月刊 |
|---|--------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|----------------------------|-------|----------|
| ⑪ | 農学部の誕生と安城キャンパス—学部の誕生と草創期①— | 堀田慎一郎 | 2006年3月刊 |
|---|----------------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|-----------------------|-------|----------|
| ⑫ | 第八高等学校—新制名古屋大学の包括学校①— | 山口 拓史 | 2007年3月刊 |
|---|-----------------------|-------|----------|
-
- | | | | |
|---|--------------------------|-------|----------|
| ⑬ | 名古屋大学 歴代総長略伝—名大をひきいた人びと— | 堀田慎一郎 | 2009年3月刊 |
|---|--------------------------|-------|----------|
-



表紙写真：第51回名大祭 経済学部前ゲート
(名古屋大学広報室提供)